

ルター新聞 Nr. 75

雑誌名	ルター新聞 = Die Luther Zeitung : ルーテル学院大学 (日本ルーテル神学校) ルター研究所ニュース
号	75
ページ	1-8
発行年	2020-12-25
URL	http://id.nii.ac.jp/1075/00000643/



ルターと礼拝

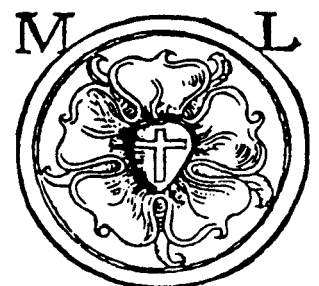
コロナの時代の中で考える

ルター
新聞



Die Luther Zeitung

ルーテル学院大学（日本ルーテル神学校）ルター研究所二ニュース・Nr.75



コロナ禍での無会衆オンライン配信中の礼拝堂
(日本福音ルーテル日吉教会)

ルター時代のペストのように、今、全世界がコロナに苦しんでいる。たとえば療養やワクチンが開発されようが、世界は元には戻らない。言葉をかえて言えば、コロナ以前から潜在的に動き出していたものが、コロナによって顕在化するものである。たとえば、デジタル技術のよう

に。
話をキリスト教の文脈で語れば、今、全世界の教会で大きな問題になっていることは、「礼拝」である。コロナ禍にあつて、従来の対面礼拝から文書礼拝、オンライン礼拝に移行した教会も多い。また聖餐式のあり方も問われている。しかし実は、万事が激変しつつある現代世界の中で、教会はいかにあるべきか、礼拝はいかにあるべきか、という問いはコロナ以前から潜在的に問われていたのだ。それがコロナによって顕在化した。そこで改めて、礼拝とは何か。「聖書」はどう教えているのか、ルターは何を語っているのか。共に考えてみたい。

(え)

今号の内容

- 2面 「まことの礼拝」を考える
- 3面 礼拝とは何か
〜ルターと共に考える
- 4面 コロナ禍の礼拝
ルターこぼれ話
「ルターのデスマスク」
- 5面 シリーズ「人間ルター」^⑬
子煩悩な人ルター
ルターのことば
- 6面 (本の紹介)
徳善義和「ルターと賛美歌」
切手に見るルター^⑳
- 7面 ルターとアガンベン
故倉松功氏を覚えて
- 8面 研究所二ニュース

「まことの礼拝」を考える

所員 立山 忠浩

新型コロナウイルスの猛威の中、ルーテル学院大学と神学校だけでなく、教会も頭を悩ませたことのひとつが礼拝の休止であった。通常礼拝の休止期間中に、教会は様々な対応を講じた。礼拝をライブ中継している教会がかなりの数に上り、説教の掲載を行っている教会もあった。例えば自宅で配信される教会の礼拝を視聴しているのである。

先日のある会合で、礼拝出席者の中にインターネットの視聴者を含めるのかどうかで、各教会で判断が分かれていることを知った。礼拝堂での礼拝と配信される映像を見ながら自宅で参加する礼拝、これはまったく同じなのか、相違があるのか、区別すべきなのかなどの議論がどこかでなされるべきなのであろう。

コロナ禍での礼拝のことで牧会する現場から考えさせられることがあった。教会での主日礼拝を再開した当初、参列に慎重な会員が幾人もいた。公共交通機関を利用される方にとっては当然のことである。そういう方々は教会の礼拝の開始時間に合わせて祈りと讃美を献げ、聖書日課に目を通し、ホームページで更新さ

れる説教も読まれていることを知った。

ひとり、あるいは夫婦での礼拝である。そして決まって耳にするのが「礼拝に出られなくてすみません」「申し訳ない」という詫びの言葉であった。この言葉には様々な意味が込められていよう。日本固有の謙遜やお詫びの精神がある。教会での奉仕ができないことへの後ろめたさかもしれないが、しかしそれだけではないように思えた。自宅での礼拝行為が、教会でのそれにくらべて劣るものであり、不十分で不完全な礼拝に過ぎないという思いを察したのである。

これは十分に理解できることである。多くの会衆の中に身をおいて、奏楽に合わせて式文を用いながら、聖書とその解き明かしに耳を傾けることに比べると、簡素で、寂しい感覚が沸き起こることは想像に難くない。しかしそれは人の思いであり、神様の思い、いやキリストの思いは異なるのではないか、それが私の中にもたげられた問いであった。「まことの礼拝」とはどんな礼拝かという問いである。

糸口を求めて我々が真っ先に行うこと

は何か。「ルターに聞け」であろう。ルターや宗教改革者たちの礼拝に関する著書を探し出し、その答えを根拠にすることである。しかしその答えを直接見出すことはできない。五〇〇年前にもペストが襲い、人々の生活を恐怖と混乱の中に落とし入れ、教会も翻弄された。ルターの手紙を辿つても、信仰者としての振る舞いに助言を与えていても、「まことの礼拝」について書いているものは見当たらない。

探し求める中で気づかされたことがあった。ヨハネ福音書の中に「まことの礼拝」の教えが記されていることである。サマリアの女とイエスの対話である。そこで記されていることは「霊と真理をもって神を礼拝すること」であり、それが「まことの礼拝」ということである。ところが、膨大な説教や聖書講義を残したルターであるが、

この箇所を論じたものはどこにも見当たらなかった。これはルターが「まことの礼拝」について、すなわち、ひとりの名も無き女がイエスと共にまことの礼拝を体験していることについて、関心を寄せていないことが分かる。「ルターに聞け」が意味をなさないのであれば、

我々自身が「聖書に聞く」しかないであろう。でもこれが本来のルターの原点である。

サマリアの女は人目を避けなければならぬ境遇にあった。ゲリジム山で多くの仲間と礼拝することが許されなかったであろう。しかしイエスと出会い、イエスと共にいる中で「まことの礼拝」を体験したことは、彼女にとってどれほどの励みになったことであろう。事実、この後イエスの証人になっているではないか。形を変えて、ひとりで礼拝を行わざるを得ない信仰者が今もいる。霊と真理をもって神を礼拝するならば、ひとりであつても共にキリストがいるのであり、それも「まことの礼拝」であることを伝える。牧会の現場で期待されている声はこれであろう。



礼拝とは何か ―ルターと共に考える―

所長 江口 再起

礼拝とは何だろう。日本語の「礼拝」という言葉は、誤解を生みやすい。「礼拝」という文字は、敬い^{うやまつ}拝むということだが、それではやや意味の片寄りがみられる。確かにそういう意味もあるのだが、それはレコードで言えば B 面だ。しかしまずは A 面が大事。礼拝はラテン語では *liturgia*、ドイツ語では *Gottesdienst*、英語では *service* だが、いずれも「拝む」というより、「仕える（奉仕）」という意味合いが強い。ここではドイツ語の *Gottesdienst* を例にとって考えてみよう。

Gottesdienst は *Gott*（神）と *Dienst*（奉仕、仕える）の合成語だが、直訳すれば「神の奉仕」となる。そこで二つの意味が生じる。（１）神が、人に奉仕する。（２）人が、神に奉仕する。そして礼拝の場合、（１）が A 面、（２）が B 面。なぜか。ルターと共に考えてみよう。ルターは修道士になっても、心の中に平安を得ることができなかった。生きることに安心感がもてなかったのである。と言っているのは、ルターにとって「神の義 (*iustitia Dei*)」という聖書言葉

が、目の上のタンコブだったからである。「神の義」ということは、神が義しいなら、我々人間もそれにふさわしく義しく生きねばならないということだ。しかし、なかなかそのようには生きてゆけない。不可能。よって神は私を裁くであろう。そういう神は恐ろしい！生きることに安心感がもてないのである。そこで若きルターは修道院の塔の一室で、必死に聖書を読んだ。ロマ書一章一七節、「福音には、神の義が啓示されていますが、それは、初めから終わりにまで信仰を通して実現されるのです」。そして、そこでルターは「神の義」という言葉の本当の意味に開眼したのである。これが有名なルターの「塔の体験」である（神学用語では「宗教改革的突破・転回」という）。この体験から改革運動が開始されるのだが、その詳細については紙面の都合上、略。しかし、その結論だけを記すならば、ルターはこの塔の一室で、「神の義」とは我々人間が自ら行うようなことでなく、逆に我々人間が神からいただくもの、贈り物である、ということに気づいたのである。神はそのあり

余る義しさを、この私にもプレゼントして下さるのである。私たちはそれをいただければよいのである（受動的な、神の義」という。「神の義」をいただくこと、これを「信仰」という。ルターの目からウロコがおちた。まさに、これこそが「福音」である。

後年ルターはその時のことをこう回想して

いる。《ここで私は全く新しく生まれ変わったと感じた。そして天国の門が開いたと感じた。そこで私は記憶の及ぶ限り聖書の中の「神の義」と類似の言葉を集めてみた。すなわち「神の働き」とは、神が我々の中に働くこと、「神の力」とはそれによつて神が我々を力ある者とする、こと、「神の知恵」とは、それによつて神が我々を知恵ある者とする、こと、「神の強さ」、「神の救い」、「神の光」も同様である》（『ヴィッテンベルク版ラテン語ルター全集』第一巻序文、一五四五年）。

つまり「神の○○○」とは、神が我々人間に与えて下さる○○○ということなのである。これこそが聖書を読むコツである！ルターはそこに開眼した。すると神と人間の関係のすべてがわかってくる。

さて、「神の義」がそういうことであるなら、「神の奉仕 (*Gottesdienst*)」すなわち「礼拝」とは、神が我々のために奉仕して下さること、つまり、神がその守りと助けの力、生きる力、つまり「恵み」を下さるときなのである（そして、それが「説教」と「サクラメント（洗礼と聖餐）」という形で実現する）。神こそが、私たち人間に仕え助けて下さる。これが礼拝の A 面なのだ。そして、それへのささやかな感謝のしるしとして、私たちは神に祈り賛美をする（すなわち敬い拝む）。これは B 面ということになる。礼拝については、もっともっと考えねばならぬことが多いが、今回はここまで。



ウィッテンベルク町教会の祭壇画下方面

コロナ禍の礼拝

—日吉教会の場合

JELC 日吉教会牧師 多田 哲

日本福音ルーテル日吉教会では、新型コロナウイルスの感染の広がりを受けて、三月二九日から礼拝堂を一時閉鎖してオンラインで礼拝の様子を配信することにしました。礼拝堂に会衆が居ない状態が五月末まで続きました。六月からは礼拝堂に集まる形での短縮礼拝を再開しましたが、オンラインによる配信は現在も継続しています。

礼拝堂を無会衆にしてオンライン配信のみにすると決めた時、それが礼拝として成立するのかわからないことについて戸惑いながらも、非常手段だと割り切って始めました。神学的な検証は事態が収束してから反省すれば良いとその時は考えたのです。しかし、事態は現在も進行中で、感染拡大は止まりません。非常手段だからと先送りしては、このまま神学的な裏付けの無いまま、それぞれの判断で個別に行っている様々なやり方が固定化してしまうのではないかと懸念があります。

礼拝の様子をオンラインで配信することには確かにメリットもあります。感染リスクの高い方々が自宅から祈りを合わせることが出来ます。これまで教会に足

を踏み入れたことのない方がオンライン配信を通じて礼拝の様子を知って教会に来るようになった例もあります。しかし、無会衆の礼拝堂で一人でカメラに向かって司式・説教をするのは、虚無感に捕われます。何のために自分がこの壇上に立たされているのかと牧師としてのアイデンティティを問われましたし、土曜日の夜が怖くなりました。礼拝に必要な身体性が欠落した無会衆オンライン配信では、体がバラバラになるような感覚さえ覚えました。現在は会衆が礼拝堂に居ますので、以前よりは心が安らかですが、それでも礼拝の様子をオンライン配信することの違和感は拭えません。

コロナ禍でオンライン配信する教会が急増しましたが、SNSでは「あの教会の説教は面白くない」、「こっちの教会は音質が良い」など、様々な教会のオンライン配信を見比べた批評が投稿されているのを目にします。視聴数や「いいね」の数で礼拝が品定めされているようです。もはや祈りと賛美はなく、世の中にあふれるネット・コンテンツの一つとして礼拝が消費されているのではないかと、の気持ち悪さを覚えます。

ルターこぼれ話

「ルターのデスマスク」

所長 江口 再起



ルターのデスマスク 切り絵・竹田孝一

ルターは、一五四六年二月一八日に死んだ。六二才。場所は仕事のために訪れていたアイスレーベンであったが、それは偶然にも彼の生まれ故郷の町でもあった。

当時、プロテスタント陣営（シュマルカルデン同盟）とカトリック陣営（皇帝軍）との対立は、一触即発の危機にあった。事実、ルターの死後、間もなくシュマルカルデ者ルターがいかに顔を歪め苦しみつづ呪われた死を死ぬかについて宣伝し、「ルターの恥ずべき死」というパンフレットまでもが出回っていた。

やがてルターが死ぬ。そこでプロテスタント側としては、偉大な改革者ルターがいかに平安のうちに祝福されつつ死んだかについて、人々に知らせねばならない。というわけで死の翌日、さっそく画家のフルテナーゲルがルターの死顔をスケッチした。さらに二〇日、遺体をヴィッテンベルクに運ぶ途中、ハレの町でルターの石膏のデスマスクが、同僚の改革者ユストウス・ヨナスの依頼でとられたという（それは現在、ハレのマルクト教会に陳列されている）。

さて、デスマスクとは何か。デスマスク研究家のエルンスト・ベンカアト『永遠の貌』（一九二九年）は次のように言う。「デスマスクのなかには、その人の最後の精神が保存されている」、それゆえ「デスマスクこそ、人間最後の像であり、永遠の貌である」。最後の精神が宿った顔。それにしても死者の顔は常に威厳にみち、そして近づきがたく恐ろしくもある……。

シリーズ「人間ルター」13

子煩悩な人ルター

所 員
高 井 保 雄

中川浩之・画

ルターは晩婚だった。そもそも生涯独身を誓い修道院に入っただが、ただ神の恵みによつてのみ救いがあると知り、ついに修道制、独身制を否定し、結婚するに至った。

結婚したのは四二才だが、平均寿命三〇才未満と言われている当時では、初老と言って良い。長男が生まれて、自分の父と同じハンスと名付けた。長い間離反していた父親との和解がこのようにして実を結ぶとは思ひも寄らなかつたのではないだろうか。

彼は結婚による喜びばかりでなく、子を失う苦しみも体験する。生涯で六人の子ども達が生まれたのだが、その内、長女のエリザベートは八ヶ月で、次女のマグダレーナは一三才で天に召された。今日残された彼の手紙や逸話を読むと、如何にルターが子ども達を愛していたか、その子煩悩ぶりがありありと目に浮かぶ。そんなルターだが、息子ハンスが不躰な行動をした時、赦しを請うまで三日

間彼の前に出ることを許さなかつたという厳格な父親の姿も見せる。

ところで、ルターの家には彼の子どもばかりでなく、若死したルターの姉妹の子ども達が一人、合計一五人の子どもが常時いた。更に近所のメランヒトンの子ども達も加わり、優にサッカーチームが出来るほどだった。

これら腕白盛りの「博士の息子」の率いる集団にはルターハウスに集う大勢の大人達もさぞかし手を焼いただろう。

この問題を一挙に解決したのが、ルターが作った「あめよりくだりて（教会讃美歌二三）」を初めとする数々の讃美歌だった。ルターが家族を前にリユートを弾いて歌うという絵があるが、そこではもつと沢山の子ども達が一緒に歌っている姿が描かれるべきだったろう。

ルターは子どもの教育のために、三十数曲を作ったが、教理問答の教えを歌にしたものだった。彼が残した子ども達への愛の贈り物と言えるだろう。

ルターの
ことば

JELC 三鷹教会牧師 高村 敏浩

聖書は、キリストを包む産着であり、
キリストが寝かされている飼い葉桶である。

『旧約聖書序文』より

クリスマスが近くなるたびに思い出すことがあります。それは、ルターの聖書の理解です。ルターは聖書を「キリストを包む産着であり、キリストが寝かされている飼い葉桶」と表現しました。宗教改革のスローガンである Sola Scriptura（「聖書のみ」、もっと正確には「聖書によつてのみ」）を聞くと、私たちは聖書そのものを思い浮かべないでしょうか。書かれた物としての聖書を思い浮かべ、聖なる書物とさえ呼ぶかもしれません。しかし、ルターが聖書を前述のように表現するとき、そこには書物以上の聖書が意図されていたようです。それは、羊飼いたちが天使たちに導かれて産着にくるまれ、飼い葉桶に寝かされているイエスに出会ったように、私たちもまた聖書という産着にくるまれ、また聖書という飼い葉桶に寝かされているイエス・キリストに出会うということです。この言葉は、『旧約聖書序文』の中に出てくる表現であり、ルターは書かれたものとしての旧約聖書について語っています。しかし、『ペトロの手紙一説教注解』で

ルターは、新約聖書はそもそも書かれるべきではなかつたとさえ言います。なぜなら、そこで語られていることは口頭で伝えられるべき事柄であり、書かれたことによつてそれが本来持つ力が削がれてしまったと考えたためでした。それは言い換えれば、ルターにとって福音とは、書かれたもの、記録ではなく、つねに語られるべき生きたものということです。

クリスチャンにとって聖書はかけがえのないものです。しかしそれは、聖書そのものに原因があるわけではありません。そうではなく、聖書を通して何かが起きるからです。私たちのための神であるイエス・キリストと出会うという出来事が起きるからです。聖書は、イエスの産着、イエスの飼い葉桶として、その出来事が起こる場なのです。産着にくるまれ、飼い葉桶に寝かされているイエスを思う降誕節、ルターのこの言葉をもぜひ思い出し、あなたのための神の福音をお聞きください。

書評 (本の紹介)

徳善義和『ルターと賛美歌』

JELC 東京教会牧師 松本 義宣



本書は、宗教改革五百年の二〇一七
年に向けて約四年間、季刊『礼拝と音
楽』に連載されたものが基になってい
ます。連載当初から全体の構想を伺って
いた者として鶴首していた内容です。賛美
歌は二通りの訳が示され、原詩に忠実な
訳と、歌うための訳が「口語」でなされ、
連載で取り上げられなかった歌につい
ても、訳詞が新たに巻末に付されていま
す。今最終校正にある『教会讃美歌増補
分冊』は、五百年を記念して日本の歌集
になかったルターの全賛美歌を歌える形
で紹介するのが目標ですが、本書の訳詞
があればその作業でした。ただ、曲は
ルター時代の古色蒼然(?)としたまま
の再現であり、これからは、ルターの歌
(歌詞)に新しい曲を付し、現代の「会衆
の歌」を生み出していくのが私たちの課
題となります。

ルターの賛美歌は、『教会讃美歌
(一九七四)』に一七曲、『讃美歌二一

(一九九七)』には一〇曲が収録されて
いますが、今まであまり詳しくは解説
されていません。日本でも古くから歌
われてきた、いわゆる《神はわがやぐ
ら (Ein feste Burg ist unser Gott)》が
代表的なもので、これが宗教改革の旗印
の歌となったのは後代の扱いによるもの
で、ルター本来の意図とは異なること
や、また近現代ドイツにおける誤用(ナ
チスの行進曲的使用等)によるこの歌の
使用の危機(筆者の伝聞でも、戦後ドイ
ツで歌集収録の可否の議論があったらし
い!)など、知られざるエピソードが満
載です。殊に、二節の従来の日本の歌集
における歌詞の「誤訳」(教会讃美歌は
例外)の指摘は的確です。悪魔と戦うた
めに「私たちに代わり、私たちのために
戦うキリスト」が原意なのですが、「わ
れと共に(讃美歌二一)」とする誤訳が
流布しているからです。その他、カテキ
ズム歌、家庭での歌、死を見据えた歌、
伝統的な聖歌の翻案等、ルターの賛美歌
が、いかに多彩で様々な用途のために紡
ぎだされ、その後の「教会の歌」の方向
付けがなされたのが、分かりやすく紹
介されています。

(日本キリスト教団出版局、二〇一七年)

切手に見るルター ③1

わが神は堅き砦

大分・別府・日田教会牧師 野村 陽一



聖書を手にしたルター(1983
西独)とウィッテンベルクのルター
ハウス(1967 東独)

ルターの賛美歌で最も有名な曲は「わが神は堅き砦」
(「神はわがやぐら」「力なる神は」教会讃美歌 450)であろ
う。『新改訂賛美歌集』(ヴィッテンベルク 1529)で発表さ
れた。ドイツで、この賛美歌は悪魔に対する勝利の歌とし
て理解され、第一次・二次世界大戦時には国威発揚の歌と
なった。曲のリズムも当初の舞踊曲風から、四分の四拍子
の勇ましい曲風へと変化していった。しかし戦後、戦争の
反省も含め、この賛美歌は勝利の歌ではなく、「慰めの歌」
であると再評価された。

注目したいのは発表年の 1529 年である。ヴィッテンベ
ルクでは 1527 年、死の病ペストの最初の流行があり、飢
餓にも苦しめられた。大学はイエナに一時移転し、町を出
る市民が続出した。ルターは、家族や市民に責任ある者は
留まるべきだと警告し、自らも家族とともに町に留まった。
病者訪問や福音による慰めと励ましのため、牧師は留まる
べきだとしたのである。ペストは悪魔の仕業としたルター
が、ペストの流行期に、あるいはその経験からこの賛美歌
を作った可能性は十分ある。

ルターとペスト、この賛美歌に関する切手は見当たらないが、アルゼンチンの花切手の初日カバーのカシェ(封筒)
に印刷された楽譜を見たことがある。

ルターとアガンベン

「生の様式（モード）をめぐる」

所員 宮本 新



ジョルジョ・アガンベン

コロナ禍の最奥に位置する問題とはなんでしょうか。イタリアの哲学者ジョルジョ・アガンベンはいち早くこれを察知しブログ上で表明、そして「炎上」した。それらの短評に言い過ぎや誤認があったとしても、そこで見逃したくない洞察が込められている。最奥とは「いのちを守る行動」を通してかえって「生の縮減」が起こり、私たちの「隣人なるもの」が廃止または抹消されている問題のことである。それは死者の埋葬、日常生活の行動制限（特に移動制限）、そしてオンラインという代替物への飛躍という三つの局面で顕在化している。これらは世界中のいたるところで経験されている

ので、人それぞれに思うこと言いたいことは山のようにあるのではなかろうか。しかしアガンベンは一点を射抜いている。その根底にいのちの破壊をみている。その破壊とは生命の破壊ではなく、「私たちの隣人なるものの廃止」である。このアガンベンからペスト禍におけるルターの書簡を読み直してみると、コロナ禍とペスト禍共通して向き合っているものがあることに気が付く。

アガンベンをサーチライトのようにしてルターのペスト書簡を再読すると、死・埋葬・墓地にかかわる独特な見方、日常生活の細部に目を凝らすこと、そして隣人との共生の仕方にこそいのちと健康の要諦を見ていることが共通している。ルターは神学者であるのでこれを「神を前に隣人と共に生きるいのち」として見つめ、ペスト禍にキリスト者の生の様式（モード）を再確認するかのようになその道理を説いている。そこで「隣人なるもの」とは人が誰かに善行をなすといった働きかけの対象ではなく、いのちに内在し働きかける当のものでもある。神を前にわがうちにあるキリストに思い

巡らすこともできるだろう。

では、ウィズ・コロナの時代、この「神を前に隣人と共に生きるいのち」が意味するものは何だろうか。その答えは三つの次元に分かれたれていく。第一は個々人の心のうちを見つめる精神世界と神との対話であり、人に差向うならば我と汝の世界がそれである。第二の方向性において、福音は他者との交わりに具体化し、生の縮減に抗する力を見出し、共同で担うべき召しや使命を喚起する。神の恵みはここで歴史や社会において具体的に考えられる事柄となる。しかしウィズ・ペストのルターにはもうひとつ見つけていた次元がある。神の恵みは個人——社会——歴史の脈絡で説かれるばかりでなく、ウイルスと他の生命一切のなかかわりにおいて見つめられるべき次元がある。神の言葉は（自然）世界に解き放たされており、そこで人はいのちあるものと生きていく。その世界とは被造世界であり、「光あれ」との神の召喚に耳だけでなく、全身を向き直して生きていくことになる。そこで改めてアガンベンのいう「隣人なるもの」とは、奥深いいのちのあり様を見つめるようにとの預言者の警句になっている。

※アガンベンの短評は『現代思想』二〇二〇年五月号において日本語訳を読むことができる。

故倉松功氏を覚えて

『ルター神学とその社会教説の基礎構造』（一九七七、創文社）の紹介

所員 石居 基夫

倉松功氏によるこの著作は、歴史神学的手法を用いて、ルターの「二世界統治説」をテーマにして、ルター神学全体の構造的把握を試みたものだ。

ルター神学といえば、もちろん「信仰義認」論が中心的で、その歴史的展開もルターの生涯の歩みとも重ねて考え、比較的取り組むのに気持ちの乗りやすい。しかし、ルターの「社会教説」、つまり信仰において社会をどのように理解し、また関わるのか、という実践的問題にも関わる教説となると、ルター自身の農民戦争やユダヤ人問題に関わる言説、そしてルター派教会においてはナチズムとの関係の問題に触れてくることもあって、たびたびルターを批判的に取り上げる議論のテーマとなってきた。そして、それぞれの議論にはルターへの誤解と読み込みが前提になっていることが多い。つまり、この教説を取りあげることが厄介で難しく、いささか躊躇われるのだ。しかし同時に、「神の統治」を律法と福音の関係において包括的に論ずるこのテーマは、おそらくルター神学全体の終末論的構造を確認するには最も適切なものだと

も言える。そのことは、この著作がぎりぎり扱うことの出来なかったドウフロウの『神の支配とこの世の権力の思想史―聖書・アウグスティヌス・中世・ルター』によっても明らかにされたところだろう。

この著作は三部によって構成される。第一部ではこのルターの『二世界統治説』に関わる研究史を批判的に一望する。そのことによって、この教説を取り上げていく著者の基本的な立ち位置を明らかにしていく。第二部はルターの『二世界統治説』と呼ばれるものがどのような内実を持っているのか、まず、ルターの資料に基づきその教説の形成と展開を明らかにしながら、ルター神学全体との関係を分析していく。第三部はこの教説の歴史的な位置づけを確認している。中世の二権説、及び熱狂主義とルターが対峙した視点を論じること、この教説が立つ、歴史神学的位置づけの考察を深めている。

やや難解だが、著者の深い問題意識とルター理解は「この世にある教会」の意義を考える上で、今なお多くの示唆を含んでいる。金子晴勇氏の『ルターの人間学』と共に、七〇年代に出された日本のルター研究の最も優れた「古典」の一つである。

研究所ニュース

新型コロナウイルス感染の猛威が、

二〇二〇年の全世界を覆い尽くしました。しかも、それは現在進行形です。わたしたちの生活も、社会も、教会も、大学も、そしてなにより私たちの気持ちや心も、一年前とは様変わりです。しかし、そうした中、大学やルター研究所に与えられている使命は変わりません。もちろん活動のあり方は例年とは随分ちがっています……。

● 秋の「牧師のためのルター・セミナー」

コロナのもたらした事態を、ルター神学の立場に立つて考察・検討するために二〇二〇年六月に三回、臨時ルター・セミナーがズーム（ウェブ会議方式）で開催されましたが、更に一〇月二二日も、秋のルター・セミナーとして前回と同様の方式で開催されました。テーマは「コロナの時代に教会・礼拝を考える」。発題者は研究所所員の立山忠浩牧師。「まことの礼拝」（ヨハネ福音書四章）とは何かをめぐって話し合われました（※なお発題の要旨は、本誌二面、また「うるて」二〇二〇年一二月号をご覧ください）。

● ルーテル学院大学教員有志との合同研究会

コロナは大学のすべての専門分野・学問に、大きな影響を与えています。そこでルター研究所とルーテル学院大学の教職員有志が合同で研究会を開き、様々な角度からコロナ問題を検討することになりました。テーマは「コロナ禍における福祉、臨床心理、教会」。一二月三日、ズーム方式で開催されました。

● オンライン「一日神学校」

例年、秋に大学に集まって開かれた「一日神学校」が、今年はオンラインで開催されました（一一月三日）。ルター研究所からは、講義「パンデミックとルター」（担当は江口所長）がなされました（※講義内容については「神学校だより」六九号（一二月一日発行）をご覧ください）。

● 公開講座

ルター研究所の二〇二〇年度の後期の公開講座「ルーテル教会」が、開講されました（担当は、石居、宮本両所員）。なお今回は対象者はすべて神学校・学院生に限定して開かれました。

● 「ルター研究」一七巻準備中

「ルター研究」一六巻（特集「ルターと聖書」）は二〇一九年一〇月に刊行されましたが（目次内容は、本紙前号の八面をご覧ください）、一七巻も只今準備中です。「宗教改革と疫病」特集号です。ルターの「ペスト書簡」の本邦初の完訳や、この書簡をめぐる考察など掲載予定です。

● 献金のお願い

ルター研究所は、日本福音ルーテル教会からの支援金（二〇〇万円）と皆様のご支援（約一五〇万円）で成り立っています。二〇一九年のルター研究所への指定献金は八三万六〇〇円でした。同封されている後援会献金の振込用紙にある「後援会献金（ルター研）」という欄にご記入いただければ、そのまま「賛助会費」として計上されます。皆さんのご理解とご支援をよろしくお願い致します。

（所長 江口再起）

ルーテル学院・ルター研究所

三鷹市大沢三ー一〇一二〇

電話 〇四二二一三ー一四六一

発行責任：江口 再起（所長）

e-mail: Luther-studies@luther.ac.jp